

願望色の存在証明

場転の刻

アリーナライブの日がやってくる。あの異能使いがAikaの命を狙っているとしたら、今日この日であることは間違いない。

前日からのステージの設営や、当日のリハーサルは順調に進んでいく。それが逆に「首謀者は本番中、大観衆の中で凶行に及ぶのではないか」という胸騒ぎを起こさせた。会場には超厳重な警備体制が敷かれているが、異能の力の前では抵抗にすらならない。PCたちも会場内の様々な場所に危険がないか目を光らせるかもしれないが、どこにも不審な点は見当たらない。

会場時刻となり、数万人の観客がアリーナドームへ飲み込まれていく。満員となった客席にはライブ直前特有の熱気だけじゃなく、最近の『Shiny!』を取り巻く怪事件がまた起るんじゃないかという不安も満ちていた。

開演時刻、アリーナの照明が落とされる。

各所に設置されたモニターに、『Shiny!』の軌跡をなぞるドキュメンタリーが映し出されていく。ほとんど観客がいなかった1stライブ。誰も自分たちを知らない地方で、大雨の中全力の笑顔を出したパフォーマンス。メンバー同士が衝突し、解散寸前になった日々。すれ違いだらけだったメンバーが初めて同じ目標を向き、心を一つにして望んだ2ndライブ。そして今日、初めてのアリーナライブ。彼女たちを応援してきた者であれば思わず涙してしまう「あの時」の映像が次々に流れていく。

オープニングムービーはフェードアウトしていき、カウントダウンが始まる。秒数を数える声とファンの期待は1秒ごとに大きくなっていく。

観客が見つめるステージの下で、待機をしているAikaが他のメンバーに語りかける。

「みんな、とびっきりの笑顔でいこう!」

5、4、3、2、1……!

『Shiny!』のメンバーたちがステージ上へと飛び出す。彼女たちを迎えたのは歓声ではなかった。

つい数秒前まで最高潮の盛り上がりだった観客たちは無言で、無気力にステージを眺めるだけ。突然の静寂に『Shiny!』のメンバーたちは困惑している。

直後、観客たちは突然怒りをあげ、暴徒のようにステージ上の彼女たちに押しかけた。気づけば観客たちの体のどこかには、あの深緑色の刻印が浮かび上がっている。このままでは『Shiny!』のメンバーたちは色喰らいの手先となった観客たちによって、文字通り押しつぶされてしまうだろう。

存在者であるPCたちは観客たちよりも早くステージ上に辿り着ける。彼女たちを逃がす場所を探すが、四方八方から押し寄せる観客たちから逃れるには、彼女たちを抱えてアリーナドームの上へと跳躍していくしかない。

なんとかアリーナドームの屋上まで辿り着いたPCたちの目に飛び込むのは、屋上全体に描かれた深緑色の刻印だった。この刻印によって会場の観客を操っていたのだ。

「わざわざご苦勞だったな。その女——Aikaをここまで連れてきてくれて!」

屋上の中心部で待ち受けていたのは、あの異能使いだった。奴は携えた剣のような絵筆を振る。その軌跡から絵の具

が塗られていくように白と黒が世界を飲み込んでいく。真彩域が展開されたのだ。

「なあ Aika、自分が信じてたファンに——、夢や理想に裏切られる気分はどうだ。それが俺が受けてきた苦しみだ!」

異能使い——いや、色喰らいは空中に絵を描く。それらは実体を持った眷属となって、色喰らいを守るように取り囲んだ。

Aikaはどうしてこんなことをするのかと問い詰めるが、色喰らいはその問いに答えようとしないう。

PCは以下の選択肢から、色喰らいの宿主だと考える人物をAikaに教えてもいい。

A:Aikaにガチ恋☆ときめきネイビー

B:箱推し☆チャージ牛丼ライブ

C:キラメキ☆Knightモーレツナイト

D:PCの誰か (①・②・③・④で指名)

誰か1人でも正解であるCを選択した場合、以下の追加演出を行い、クライマックスシーケンスに第三勢力『Shiny!』を追加する。

▼追加演出

「……でも、それでもずっと私たち『Shiny!』を応援してくれただよ」

Aikaは他のメンバーたちに振り返り、決意したように強い口調で話し出す。

「それならきっと、私たちの声が届くはずだよ。下にいるファンのみんなにも、Knightさんになって。だから歌おう。今の私たちにできるのは、それだけだから!」

Aikaはマイクを握り締めた。

「それに、Knightさんは——、内藤先生は、私たちと同じように、夢を与えることが大好きなはずだから。きっと、届くよ」

Aikaはそう言って笑い、歌い始める。その言葉に他のメンバーたちも頷き、続けて歌い出す。

すると驚くべきことが起こる。白と黒だけだった彼女たちの体が、うっすらと色めいていくのだ。

真彩域とはこの世の領域を超えた理、外界法則が支配する異空間だ。この空間における「強さ」とはすなわち、願望の強さである。

願望の異能使い、存在者の足元には及ばずとも、彼女たち『輝きの偶像』は強い願望色を携えた一般人だ。現実世界において影響を及ぼすことはなくとも、この真彩域であればその願いは輝きへと——力へと変わる。

クライマックスシーケンス

戦闘の開始処理

①戦闘勝利条件の確認

戦闘勝利条件:ボスエネミー「絵筆の勇者」の撃破

戦闘敗北条件:PC全員が戦場から離脱する

○登場エネミー

・絵筆の勇者 (ボスエネミー)

願望色の存在証明

- ・塗りつぶされた仲間たち (モブエネミー)
- ・シチュエーション×2

とびっきりの笑顔で、今日来てくれたみんなを応援しよう！」
Aikaの言葉にメンバー全員が次々に頷いた。誰からでもなく円陣を組み、全力で、カー一杯に掛け声を叫ぶ。

②場転の刻の処理

正解であるCを選択したPCがいる場合、戦場に第三勢力『Shiny!』を追加し、敗北条件に「第三勢力『Shiny!』の撃破」を追加する。

『Shiny face,Cheer up!!』

エンディング

絵筆の勇者を撃破しても宿主である内藤は生きているが、ひどく体力を消耗しており瀕死の状態だ。彼がこの彩害の元凶であることは間違いない。しかし、彼も「誰かを本気で応援する気持ち」を色喰らいに利用された被害者の1人であることも、また事実だろう。

内藤の生死は残されたPCたちに任される。彼を殺そうとする場合、Aikaは「どんな形であれ、私たちを応援しようとしてくれていた彼を許してあげて欲しい」とPCたちに懇願する。

PCたちが存在粒子を吸収するとベルソナリンクを失わなかった世界への界竄が起こる。収縮する真彩域から現実世界に戻ってくると、時間は開演直前まで巻き戻っているようだった。

再びステージ上へ登場した彼女たちを、今度は大歓声が迎える。ファンの声援と彼女たちの歌声が響き、アリーナは最高潮のボルテージで最後のAikaのMCまで続いていく。

「皆さん、今日のライブに来てくれて、本当にありがとうございます！ このアリーナライブを実現するために、色んな人たちが力を尽くしてくれました。多くの警備員さんを始めとした、スタッフの皆さん」

ステージ横で待機しているPC④と目線が合い、彼女が微笑む。

「楽しくて、でも辛かった今日までの日々と一緒に走ってきた、『Shiny!』のみんな」

Aikaは隣にいるPC②の手を、ぎゅっと握る。

「そして何より、『Shiny!』を応援してくれるファンの皆さん。このアリーナには、私たちが『Shiny!』になる前からずっと応援を続けてきてくれた方もたくさんいます！」

Aikaの言葉に観客が沸く。アリーナ席で歓声を送るPC③を見つけたAikaが、手を振ってウィンクを投げた。

「ここまでの道はとっても辛くて、苦しくて……。何度も泣いて、もうやめたいって思いました。それでも私たちが諦めずにここまで来れたのは、皆さんの応援があったからです。それが無かったら、私たちはとっくに挫けてしまっていました」

Aikaの声は次第に渗んでいき、瞳から大粒の涙がぼろぼろとこぼれる。

『「夢は必ず叶う。」そう思います。でも、そのためには、誰かの応援が必要なんです。だから、私たちがここから応援します。夢を追いかける全ての人と、それを応援する全ての人に届くよう、力いっぱい応援します!!』

それでも全力で笑おうとするAikaは、まぶしいほど美しく輝いていた。最後の1曲の前、『Shiny!』はステージ中央に集まり、メンバー同士の顔をお互いに見合う。

「私たちがこうしてアイドルでいられるのは、きっと長くない。でも、きっとそれでいいんだよ。だから今、全力で輝こう！」

希望色の存在証明

PCの公開情報

PC ①	天涯孤独
<p>古くからの友人に誘われ、付き合いで『Shiny!』のミニイベントに参加することにした。 あなたの友人は、あなたが存在者であることを知らない。 あなた自身、アイドルにはそこまで興味が無い。</p>	
<p>〈指定〉 特になし</p>	

PC ②	『Shiny!』の序列 No.2
<p>あなたはアイドルグループ『Shiny!』に所属しているアイドルだ。 年齢、国籍など全てが非公開の、ミステリアス・ビューティーである。 グループのセンターを務める『Aika』とはライバル関係で、彼女からセンターの座を奪うことが目標だと公言している。</p>	
<p>〈指定〉 外見が女性であること</p>	

PC ③	Aikaの熱烈なファン
<p>あなたはアイドルグループ『Shiny!』のセンターを務める『Aika』の熱烈なファンだ。 今日開催されるイベントにも、彼女に声援を届けるために奮って参加した。 同じく『Shiny!』のファンである友人が複数いる。</p>	
<p>〈指定〉 特になし</p>	

PC ④	公安零課の存在者
<p>あなたは公安零課に在籍している存在者だ。 今日開催される『Shiny!』のミニイベントには、ある任務のために訪れている。</p>	
<p>〈指定〉 公安零課への所属</p>	

PC①の情報

PC ① / 情報深度 : 1

あなたが存在者となったのは、まだ幼い頃だった。
 一家全員で出かけていた帰りに、交通事故に巻き込まれたのだ。
 死の直前、外界存在が持ちかけた契約を結ばなければ、あの時死んでいたのは間違い無い。
 だが、事故を生き延びたのはあなただけで、他の家族は全員、帰らぬ人となった。
 幼かったあなたにとって家族を失うことは、世界のほとんどを失うことと同義だった。
 存在者となる契約を結んだ以上、あなたが抱く願望は他人より強い願望でははずだった。しかし、あなたは自分の願望が一体なんであるのかが全くわからなかった。
 あなたのほとんどを占めていた家族が失われた世界に残り、なんの意味があるのだろうか。
 存在者となったばかりの頃、家族を失ったあなたのペルソナリンクはとても少なかった。彩能の行使はおろか、願望器を扱うことすらも命懸けだった。低級色喰らいとの戦いですら、何度も存在を消失しかけた。それでも、戦わなければ自分は消えてしまう。辛い戦いの中、他の存在者が抱くような、叶えるべき願望もわからない。いっそ消えてしまった方が楽なのではないかと何度も考えていた。
 それでも、家族の中で自分だけが外界存在に選ばれた理由があるはずだ。
 そう信じなければ、この願望器は重すぎて、落としてしまいそうだった。
 きっと、あの頃のあなたの願望は「自分が存在者となった理由を知ること」だった。

PC ① / 情報深度 : 2

あなたが内藤雄一と出会ったのは、まだ学生の頃だった。

どんなときも絵を描いている奴だったが、同級生の似顔絵を描いてあげたり、コミカルにデフォルメした教師のイラストを黒板に描いてみんなを笑わせたりと、クラスの中心人物の1人だった。

あなたは内藤雄一のような人間のことを、自分とは違う人種なのだと感じていた。希望と活力に溢れる、物語の主人公のような存在だと。

そんな人種と同じ空間にいと、何のために生きているかも分からない自分が、酷くちっぽけな存在に思えてしまう。あなたは彼のような人種と、意識して距離を保つようにしていた。

ある日、あなたは内藤雄一が1人で歩いているのを見かけた。

彼に見つかれば、きっと話しかけてくる。そんな面倒はご免だ。あなたは俯いて踵を返し、その場を離れようとした。

その時、通りにクラクションが響き渡る。

猛スピードのトラックが、真っ直ぐ内藤雄一に向かって暴走していた。

忘れたことも無い、あの日の光景が重なって見えた。

気が付くと、彩能^{カラード}を行使してトラックと彼の間に割り込んでいた。突然のことに呆然とした顔で、内藤雄一はあなたをじっと見つめていた。

「俺、漫画家になりたいんだ。今も描いてるんだけど、主人公が決まらなくて」

その日の夕暮れ、しばらく黙って歩いていた彼が語り出した。

「でも、決まった。俺のデビュー作の主人公は、お前だ」

彼は突然足を止め、スケッチブックにガリガリと書き殴る。

「さっき、全然何もわかんなかったけど、頭ん中にビリビリってきた」

描きあげられたのは、凛々しい表情で堂々と立つ、あなたによく似たキャラクターだった。

「お前が助けてくれたんだろ。世界で一番カッコいいヒーローだった。だから、主人公になってくれ。俺の夢の、主人公に」

——ああ、ああ。

ずっと、自分には何も無いと思っていた。

無為に戦い続け、無為に世界から消えていく。それが自分の人生なのだと、ずっと思っていた。

そんな自分が、こんなにも輝くものを守ることができたのだ。

たとえ自分が輝けなくとも、誰かを守ることはできる。

あの日、自分が力を手にした理由が、初めてわかった気がした。

真っ暗だった心に、一筋の光が、差し込んだ。

あなたが見つけた願望は「人の夢を守ること」である。

願望色の存在証明

PC ② / 情報深度 : 2

イグザシスト

存在者となったあなたは、願い続けることで美しさを保つことができる。そのためには色喰らいを艶し、存在粒子を手に入れ続けなければならなかった。だが、美しくあり続けられるのであればそんなことは苦ですらない。

あなたの美はさらに磨き上げられ、いつか世界の全てを手に入れることができるだろうと、心からそう思っていた。だが、あなたは知らなかった。老いないということは、他の人間と異なる時間を生きることなのだ。

若々しく美しいままのあなたを、周囲の人間は次第に気味悪がるようになっていく。1人、また1人とあなたの元から人々は去っていき、気づけばあなたは化け物と呼ばれるようになっていた。

あなたは人々から追放された。生まれた土地を遠く離れ、異国の地まで逃げ延びた。そこでは昔と同じように、あなたの美しさを讃える人々に溢れていた。しかし数十年後、故郷と同じように、人々は美しいままのあなたを気味悪がり、恐れ、土地から追い出した。

そんなこと何度も何度も繰り返した。どうして、美しく輝く自分が、こんな扱いをされなくてはいけないのか。どうしてこんな惨めな思いをしなければならないのか。

長い時が経ち、あなたは人目から隠れて世界の影で生きる存在者^{イグザシスト}となっていた。

何があるでもなく、ただ生き延びるために色喰らいと戦い続ける空虚な日々。磨き続けたあの美しさは、とっくの昔にほこりを被ったままだった。

もう、全て終わりにしてしまおうか――。

そう考えた日、あなたは偶然、ショッピングモールの催し物のステージを目にする。駆け出しアイドルたちの、ミニライブショーだった。

化学繊維で作られた、安っぽい衣装。使い古されたスピーカーから鳴る、チープな曲。誰もが通り過ぎるような、なんてことないステージ。

それでも、その上できらきらと輝く、とびっきりの笑顔が、あなたの目を奪って離さなかった。

懸命に。滴る汗を流して。心の底から楽しそうに。この場にいる全員に、笑顔を届けようとする。

あの輝きは、自分のためじゃない。他の誰かのために、彼女は輝いているのだと、そう伝わってくる。だからこそ、その姿が、その存在が、彼女の全てが、美しいのだ。

自分以外の存在を、初めて美しいと思った。目指していた至高の美しさを、あなたはついに、見つけたのだった。

彼女の隣でなら、もう一度、輝ける。いや、輝きたい。ずっと、ずっと――。

ずっと消えていた願望の火が、燃え上がる熱を感じた。

あなたの願望は「Aika^{アイカ}とともに輝き続けること」である。

願望色の存在証明

PC②／情報深度：3

あなたは今、アイドルユニットである『Shiny!』のナンバー2に君臨している。ナンバー1、つまりセンターはあの時にあなたの目を奪った、Aikaという少女だ。

Aikaは、容姿が特に優れていたり、何か他の人より頭ひとつ抜きん出ているところがあるわけではない。しかし、ステージ上のAikaは別格だった。

Aikaの存在はスポットライトやカメラ、そして観客の視線を自然と集めてしまう。彼女の笑顔や全身から放たれるオーラは、まさしくカリスマと呼ぶにふさわしいものだった。

でも、あなたがAikaを最も美しいと感じるのは、彼女自身の生き方だった。

Aikaは誰よりもむたむきに、愚直と言えるほどの努力を続けてきた。どんな仕事にも全力で取り組み、わずかでも空き時間ができれば自己の研鑽に努めていた。失敗したときもめげることなく、前向きに挑戦を続けてきた。だからこそ『Shiny!』が発足したときAikaがセンターに抜擢されたのも、当然だと思った。

あなたはアイドルとしての活動に、存在者の力は使わなかった。Aikaの隣で輝くために彩能を使うことは、あなたにとって卑怯なことに思え、美しくなかった。

Aikaもまた同じように、あなたと競り合うことを望んでいた。研修生時代から互いに励まし合い、高め合ってきた。それはデビューした今でも全く変わらない。あなたにとってAikaは理想であり、同時に最大のライバルでもあった。だからこそあなたは、自身の目標が「センターになること」と公言している。Aikaの隣で努力を重ね、彼女と切磋琢磨することが、何よりも自分が美しく輝ける瞬間だからだ。

しかし今、Aikaの周りでただの不運なトラブルや嫌がらせではない、不可解なことが続いている。アイドルである以上、多少の嫌がらせ受けるのは仕方がない。だが、ここ最近Aikaの周りで起こるトラブルはその範疇を超えている。ある日、あなたは楽屋でAikaに声をかけようとした。その時、彼女は声を押し殺し、肩を震わせて涙を流していた。普段はどんなときでも笑顔を絶やさず、あのAikaが。

声はかけなかった。彼女に伸ばそうとしていた手をぎゅっと握り、踵を返す。

許せない。あなたに再び輝きを与えてくれたAikaが、傷ついている。

あなたは存在者として決意した。

彼女を汚そうとするものがあるのだとしたら、許すわけにはいかない。Aikaはあなたが失っていた、美しい輝きそのものなだから。

あなたの願望は「Aikaの輝く笑顔を再び取り戻すこと」である。

PC③の情報

PC③／情報深度：1

他の存在者と比べて、あなたは戦うことが得意ではなかった。

叶えなかったはずの願望も、色喰らいとの戦いに見合うだけのものじゃない。訳のわからない契約なんて結ぶんじゃないかと、何度も何度も後悔した。

だが、存在粒子を得なければ自分の存在は消えてしまう。選択肢は無い。

あなたは他の存在者に媚びへつらい、倒した色喰らいの存在粒子のおこぼれをもらったり、狩り残された低級色喰らいを斃したりすることで、自分の存在を永らえさせるようになっていた。情けなくて涙が出るが、あなたにとってこれが存在者として生きる術なのだった。

あの時、軽い気持ちで契約なんてしなければ、こんな惨めな思いをすることはなかったのに。

あなたの願望は「存在者という呪われた運命から逃れること」だった。

願望色の存在証明

PC ③ / 情報深度 : 2

あなたの二度目の人生の転機は、突然訪れる。

おぼつかない足取りで歩く、低級色喰らいに取り憑かれた少女を見つけた。取り憑かれた宿主が夢遊病のように無意識でさまようのはよくあることだ。

自分でも倒せる獲物を逃す理由はない。手早く色喰らいを倒す。宿主だった少女が糸を切られたように脱力し倒れそうになる直前、あなたはなんとか抱きとめた。

「あなたが——、助けてくれたんですか——？」

腕の中、まだはっきりとしない目線で、少女があなたを見つめていた。

彼女は半覚醒のような状態で、うわ言のようにぼつりぼつりと自分のことを語り出した。あなたはこんな状態の少女を置いていくこともできず、彼女を抱えて病院へと向かう。

彼女はデビュー前のアイドル、いわゆる研修生というやつで、明日初めてのステージに立つらしい。だがここ数日、黒い霧がかかったように胸の中が息苦しく、暗い気持ちばかりがあふれてきたのだという。誰も自分のことなんて見てくれない、指をさされて笑いものにされるだけなのに、どうしてそんなことをしなければならぬのだろう——、そう思っていたと。

「でも今なら、今ならちゃんと、笑顔でステージに——」

彼女のその言葉が気になったあなたは翌日、会場のショッピングモールを訪れることにした。

多くのアイドルの卵が出演するミニライブ。道行く人が時折視線を向けても立ち止まることはない、そんなひと枠5分もない短いステージが続く。

1時間ほど、イベントの最後まで眺めていたが、昨日の少女は現れなかった。それもそう、昨日の今日なのだ。病院で寝込んでいるのだろう。そう思ってこの場を去ろうと、席を立った。

「遅れて——、遅れてごめんなさい！」

ステージから昨日腕の中で聞いた、あの声が聞こえた。彼女は汗を流し、荒くなった呼吸を必死に押さえつけて、そして満面の笑みで、こう続ける。

「Aika ですよ! あなたに笑顔と、夢を届けます!!」

彼女のパフォーマンスは、時折優れているものではない。それなのに気づけば人々の視線は彼女を追っている。そして何より、彼女のきらきらと輝く笑顔が、とにかく綺麗だった。

自分は、この輝きを守ったんだ。そう思ったとき、まるで、これまでの過酷な人生が報われた。そんな気がした。

それ以来あなたは存在者として、これまでよりずっと強く戦えるようになった。彼女、Aika が頑張って活躍している姿を見るたびに勇気が、力が湧いてくる。ただ怯えているだけだった自分が、あの Aika を守ることができた。それだけで、あなたが存在者になった理由は十分だった。

Aika がセンターを務めるユニット『Shiny!』はメジャーデビューし、今最も勢いの乗っているアイドルグループと言われている。だが、ファンの間では密かに不穏な噂が流れていた。

「Aika は何者かからの嫌がらせを受け、活動休止寸前らしい——」

もしその噂が本当なら、自分に何かできることがあるんじゃないか。

あの日、あなたの人生に光をくれた Aika に、恩を返すことができるんじゃないか。

あなたの願望は「誰かの悪意から Aika を守ること」だ。

PC④の情報

PC④／情報深度：1

あなたの所属している公安零課に四号業務、つまりボディガードの依頼が持ち込まれた。

色喰らいが起こす彩害に対処するために組織された特別対策室。それが公安零課の秘すべき、そしてあるべき姿だ。しかし警視庁内から向けられる視線は冷たい。実態のよくわからない組織でありながら、予算だけは割かれている。ただでさえ引っぱる足がないか探し合っている警察内で、そのような立場の公安零課は共通の敵にされがちだ。そのため公安零課にはこうやって本来の業務とは別の仕事——他の部署が責任を負うのをためらった厄介ごと——が、しばしば持ち込まれる。

あなたは上司のデスクに置き去りにされていた書類に目を落とす。

警護対象は、巷で話題になっているアイドルグループ『Shiny!』のメンバーである Aika 氏。警察への依頼自体はストーカー被害の相談と対処であった。なるほど、こういった著名人へのつきまといや嫌がらせの対処は、犯人を特定するのが難しい。しかし被害の拡大を食い止められなければ、世間から警察組織に向けられるバッシングは苛烈なものとなる。つまり失敗した際のデメリットが、労力の割に合わないのである。

大きな事件の犯人を追い詰めるのが警察官としての花形仕事だ。だが、他の業務をないがしろにしていけない理由はない。新たな犯罪の被害者を生んでしまう前にその芽を摘み取ることこそが、本当の警察官の職務ではないだろうか。それに、こういった仕事をひとつひとつ確実にこなしていくことが、警察組織内での公安零課の地位向上へとつながっていくはずだ。

あなたは上司の元へ訪れ、この業務を自分が担当できないかと頼み込んだ。

あなたの願望は「警護対象を守り抜くこと」である。

願望色の存在証明

PC ④ / 情報深度 : 2

—だが、あなたが依頼の担当を嘆願したのには、別の理由もあった。

今、界隈の誰もが最も熱いと評するグループが『Shiny!』だ。昨今の『何とか四十八手』などで食傷気味だったアイドル業界に閃光のように現れた「本物のアイドルグループ」。アイドルそのものの「原点回帰」をテーマにしたプロデュース、メンバー一人ひとりに焦点を当てつつもグループ全体の統一感を維持し続けるパフォーマンス、そして何より注目すべきは序列ナンバー 2 とナンバー 1 の切磋琢磨と、そこから波紋が広がるように他のメンバーの可能性が刺激され『Shiny!』として日々成長していくストーリー性。これを追いかけてしる一体誰がアイドル好きを名乗れようか。

—そう、何を隠そう、あなたは根っからのアイドルオタクなのである。

しかも今回の警護対象は“あの”^{アイカ}Aika なのだ。彼女の何が特別かと聞かれると人によってアイドルのどこに魅力を感じるかという数日にわたる議論から始めなければならないためここでそれを自分という個人の価値観だけで語るのには非常に難しいが彼女の魅力を語るにあたってはやはりステージパフォーマンス無しには語れない。どれだけ講釈を垂れようがその前に彼女のステージを一度観るべきだ。観てくれ。観ろ。トぶぞ。『我々がいつの間にか忘れかけていたアイドルというアイデア、その原初の輝きがそこにある』とは、はてさて誰が語った論評だったのだろうか。

それなのにも関わらず、あなたは『Shiny!』のステージパフォーマンスを一度も観た試しが無いのである！

公安零課に所属する存在者は多くない。そのため非番でも臨時の呼び出しがあればどこへだろうが臨場せざるを得ない。抽選率 300 倍という狭き門を潜り抜けて手にしたあの公開収録も徹夜したい思いを必死に抑えつつ始発ダッシュをキメて待機列に 11 時間並びようやく眼前に迫ったあの物販も他のファンたちが皆口々に最高だったとかこれを観ただけで生まれた意味があったとか神むり死ぬとか語彙力喪失感動レボで SNS が埋め尽くされたあの伝説の 2nd ライブも全て、全て参加せず撤退するしかなかった。

そんなあなたの元にやってきたチャンスが、今回の依頼だったのである。これはもう^{アウトワンス}外界存在のおぼしめしとしか思えなかった。

だがしかし、あなたは公安零課の、警察組織の一員である。万が一私情によって職務に携わっているなど周りにバレたら、特にあなたが愛するアイドルたちにバレようでもすれば、その信用失墜は避けられない。世間から警察へのバッシングなんかどうでもよくなる程とにかくそれが辛い。あってはならない。

あなたは誇りある警察官であり、誇りあるアイドルオタクだ。だからこそ、職務より自己の願望を優先する者であるなどと思われてはならない。

あなたの願望は「自分が立派な警察官であると思われたまま、今回の依頼を完遂すること」だ。

ちなみにあなたは箱推し（特定の誰かでなくグループのメンバー全員を平等に愛するファン）である。

願望色の存在証明

ドラマポイント

No.1	陰る輝き
トリガー	オープニングで判定を行なったPC、もしくはPC④の参加
<p>あなたは^{アイカ}Aikaと彼女のマネージャーから話を聞くため、^{アイカ}Aikaの元を訪れる。</p>	

No.2	空席の理由
トリガー	なし
<p>ミニイベントの空席が気になったあなたは、終了直後の会場周辺を探索することにした。</p>	

No.3	バラエティの収録
トリガー	なし
<p>^{アイカ}Aikaが出演する生放送バラエティ番組の収録で、トラブルが怒らないか目を光らせる。</p>	

No.4	噂の調査
トリガー	PC④は参加不可
<p>^{シャイニー}『Shiny!』ファンの中で流れる噂から手がかりを探してみることにした。</p>	

No.5	神、探してます
トリガー	PC②は参加不可
<p>^{シャイニー}『Shiny!』ファンがよく来るといふアイドルカフェを訪れると、チー牛氏が話しかけてくる。 「一大事ですぞ！神降臨でござる！」</p>	

No.6	ドラマの撮影
トリガー	なし
<p>^{アイカ}Aikaが出演するテレビドラマのロケに付き添う。銀行の貸金庫のシーンの撮影らしい。</p>	

No.7	護衛
トリガー	なし
<p>記者会見以降、好奇の目に晒されることが多くなった^{シャイニー}『Shiny!』の護衛に当たることにした。</p>	

No.8	脱出と過去
トリガー	なし
<p>あなたは先の襲撃で傷を負い、入院した^{アイカ}Aikaを見舞いに訪ねることにした。</p>	

願望色の存在証明

情報カード

『Shiny!』

今、アイドル業界の一大ムーブメントを巻き起こしているグループ、それが『Shiny!』だ。キャッチフレーズは『キミが応援して、キミを応援する輝き』。

『Shiny!』は「アイドルとしての原点回帰」をコンセプトとして結成された。最初は精力的な地方営業や SNS での情報発信から始まった。地下アイドルと変わらないほどのグループだった。地道な営業活動とメンバー 1 人ひとりのひたむきな努力にスポットを当てて発信していくスタイルが世間から評価されていき、満を辞してメジャーデビューを果たす。センターを務める Aika を筆頭に『Shiny!』の快進撃は止まらず、今では雑誌、ラジオ、地上波といった様々なメディア媒体で彼女たちの活躍を垣間見ることができる。

No.1

陰る輝き／強がりのワケ

車の運転手は気絶しているが、その頬には一般人には見えない深緑色の異能の刻印が描かれていた。

一般人である Aika は彩能を認識できないが、あなたが助けてくれたということはなんとなく察しているようだ。

Aika は自分を助けてくれたあなたに頭を下げて礼を言う。しかし続けて「でも……これ以上は私のことに関わらないでください」とだけ言って、足早に去ってしまうのだった。

【以下ディレクター PC (+演出手助け PC) のみ閲覧可能】

警察への説明など一連の処理が終わったあと、マネージャーは現場に残っていたあなたに「Aika、普段はあんな冷たい子じゃないんですよ」と話しかける。

「私、実はつい最近 Aika の臨時担当になりました。なぜかという先日、スタジオでテレビ番組の収録があった時です。普段はそんなことあり得ないんですが、背景用のパネルが Aika がいる方に突然倒れてきました。その時、それに気づいた以前のマネージャーが Aika をかばったんです。命に別状はありませんでしたがそれでも大怪我を負ってしまい、今も入院中。それ以来 Aika は少し塞ぎ込みがちになって、僕たちスタッフからも距離を取ろうとしているみたいでして。そんなこと気にしてる場合じゃないっていうのに、あの子は……」

No.2

空席の理由／絵筆の眷属

色喰らいを攻撃すると、まるで液体に攻撃したかのように手応えがない。存在粒子を残しすらず、蒸発するように消失してしまった。おそらくこの絵筆は色喰らいの本体ではなく眷属、もしくは依彩の一部なのだろう。ミニイベントの空席も、この絵筆に襲われたことが原因なのではと推察できる。

また、絵筆を倒すときに勢い余って携帯端末をも破壊してしまう。本人には気の毒だが、色喰らいに襲われるよりよっぽどマシだと思ってもらうことにしよう。

【以下ディレクター PC (+演出手助け PC) のみ閲覧可能】

あなたが絵筆を倒したとき、携帯の持ち主は SNS を利用していた。PC ②を揶揄する内容を投稿した直後だったようだ。

No.3

バラエティの収録／アイドルとして

Aika はあなたに軽く頭を下げるや否や、すぐにスタジオ内の観客の避難誘導を始める。

誰かがそれをたしなめても、Aika は謝りこそするが「でも、せっかく会いに来てくれたファンが、楽しい思い出もできず怪我をして帰るなんて、耐えられない」と言葉を続ける。

【以下ディレクター PC (+演出手助け PC) のみ閲覧可能】

司会のタレントは色喰らいに操られていた。羽交い締めにした Aika の耳元で「カメラに向かって『私は『Shiny!』のセンターに相応しくありません』って言えばやめてあげるよ」と言っていたのだと、Aika が話してくれる。Aika をセンターの座から引き摺り下ろすことがこの色喰らいの目的なのだろう。

願望色の存在証明

No.4

噂の調査／妬みか事実か

ガチ恋氏はよくわからないがおそらく助けてくれたであろうPCに札を言い、AikaとPC②、そしてそのファンについて話してくれた。
 ・PC②は『Shiny!』のメンバーで最も謎に包まれた人物。年齢、国籍も公開されていない。
 ・『Shiny!』は最近のアイドルグループでは珍しく、ファンの投票による序列付けをしていない。だからこそグループ発足以来、ナンバー1になれていないPC②のファンは、Aikaは運営の鼻根によってセンターであり続けているのだと考えがち。

【以下ディレクター PC (+演出手助け PC) のみ閲覧可能】

「そういえば……。先日のミニイベントで見かけたあの警備員というか、スーツを着た方(PC④)ですが、見覚えがありまして。それは伝説のライブと称されている『Shiny! 2ndライブ』の入場間際のことであります。その方は怒りの業火を体現したかのような形相で、一目散に会場から走り去っていったのでありますよ。どこかで見覚えがあると思っていたのであります。今思い出しましたぞ。ちなみに私がAikaの魅力に気付き恋慕の情を抱くようになりましたのも2ndライブからでありまして……」

No.5

神、探してます／意外な素性

あなたは絵筆状の眷属を倒すために店内を奔走する。最後にKnight氏を襲おうとしていた眷属を倒すとき、彼のグッズが大量に詰まった段ボールを倒してしまう。床に散らばってしまったグッズをKnight氏と片付けていると、その中に広がった一冊のスケッチブックがあった。そこには、カフェの交流ノートに描かれていたあの神絵師のイラストの、ラフスケッチが描かれていた。

あなたがそれに気づくと、Knight氏は焦った様子であなたを店外の人気のないところに連れていく。

「他の人には言わないでくれよ」と念押しし、Knight氏は話し始める。

Knight氏は以前、本名である「内藤雄一」という名前でのプロの漫画家として活躍していた。だが、書いていた作品の連載が終了したのをきっかけにプロを引退し、今は貯金を食いつぶして生活しているのだという。

「足を洗った元プロが描いた……なんて知られたら面倒なことになるから黙ってたんだ。あれは記録みたいなもので、別に世間からの評価欲しさに描いた訳でもないし。だからちょっと、他のやつらにも黙っててくれないうか、頼むよ」

【以下ディレクター PC (+演出手助け PC) のみ閲覧可能】

カフェまで戻る道を歩いていると、Knight氏は独り言のように話し始める。

「今俺が描きたいって思うのは、PC②ちゃんだけなんだ。まあ問題は、どんだけ彼女の絵を描こうが現実のPC②ちゃんの方が何万倍も美しい綺麗だってことなんだけどな。きっとイラストはSNS経由でPC②ちゃんが見てくれるだろうし、他にどんなプレゼントしよっかな……。『Shiny!』のセンターとかか？」

彼はそう言って笑い、会話を閉じた。

No.6

ドラマの撮影／Aikaの懇願

金庫内では共演俳優が無言で立ち尽くしている。彼の顔面には深緑の異能の刻印が描かれていた。Aikaは泣いて怖がる子役を抱き抱え、優しい声色でなだめ続けていた。

共演俳優はAikaたちに「もう一度段取りを確認しておこう」と言って金庫内に誘導し、突然扉を操作して締めたのだという。真っ暗な金庫の中、彼はAikaに「これ以上は何もしないよ。ただ、アリーナライブが終わるまでここにいてくれさえすればいいんだ」とだけ言ったそうだ。

【以下ディレクター PC (+演出手助け PC) のみ閲覧可能】

子役を母親に引き渡した後、Aikaは腰が抜けてその場にへたり込んでしまう。

自分も恐怖に怯えていた中、あの子を怖がらせまいと必死に耐えていたのだ。

「今、立ち上がれなさそうで……ちょっと別の場所まで連れて行って行ってくれませんか」

あなたが現場から離れた場所まで連れていくと、Aikaはあなたが見守る中、堰を切ったかのように声を上げて泣いた。これまで胸の奥に抱え込んでいた不安や恐怖を、全て吐き出すように。

ひとしきり泣いたあと、Aikaはあなたにほつりほつりと話し始める。

「……まだ研修生だった頃、誰かに助けってもらったの。ほんやりとしか覚えてないんだけど。その人が助けてくれたから、私はこうやって夢に向かって走って来れたんだ。だから私も、その人みたいに誰かを助ける人になりたいって思った。アイドルとして、みんなに夢や元気を与えられるようになりたいって。

だから今、私を助けようとしてくれる人たちが代わりに傷ついていくのが、すごく辛くて。私1人が抱え込んで解決するなら、それでいいって思った。でも、私だけじゃどうしようもできなくて、ずっと怖かった。でも、さっきみたいに他の人も巻き込んで傷つけちゃうのが、一番怖い」

Aikaは泣き腫らした目であなたを真っ直ぐに見て、懇願する。

「だから、お願いします。私たち『Shiny!』と……ファンのみんなを、守ってくださいませんか」

願望色の存在証明

No.7

護衛／強襲の果て

絵筆を振るう、PC ①によく似た男は「お前らに PC ②は汚させない、俺と同じ目には絶対あわせない」と激昂する。「あいつらを庇うのか、人の夢を壊すことしかできない、生きる価値もないクズを庇うのか」あなたが食い止めようと間に入ると、彼は我を失ったように叫び、暴れる。

あなたは攻撃をなんとか凌ぎ切るが、攻撃の余波で瓦礫が飛ぶ。その1つが Aika の頭部に命中してしまう。見たかぎり重症にはなっていないさそうだが、彼女は気を失ってその場に倒れ込んだ。

少しの沈黙のあと、異能使いは高らかに邪悪な笑いをあげた。

「わかった、わかった。もう回りくどい手段は取らない。Aika、お前は直接俺が殺す。それを遮ろうとするやつも、全員殺す。お前がこの世にいる限り、俺の望みは絶対に叶わないみたいだからな。せいぜい怯えて過ごせ。お前にも俺と同じ絶望を味わわせてやる。夢に裏切られ、失意に満たされたお前を、俺が殺してやるよ」

色喰らいは再び高笑いをあげ、絵筆の剣で空中に描き出した扉を通り、この場から去っていった。

【以下ディレクター PC (+演出手助け PC) のみ閲覧可能】

この男と戦っていると、存在者同士の共鳴戦のように、彼の過去の体験が幻影として伝わってくる。

必死で描き続けてきた夢に裏切られ、絶望の底にいた彼は自室で深夜、自死を試みる。足元の椅子を蹴飛ばせば、この苦しみから解放される——。その寸前、いつからつけばなしだったのかもわからないテレビで、アイドルグループの深夜バラエティが流れていた。ドキュメンタリー調のコーナーだったのだろう。PC ②が、『Shiny!』でセンターを目指し続ける理由を語っていた。

「センターを、Aika を超えることを目指すのは自分のため。Aika は最大のライバルで、最高の目標。ファンのために成長を続ける彼女は美しい。そんな彼女を追いかけている間、自分をもっと美しく輝いていられる」

インタビューが終わり、画面が切り替わって PC ②がソロの曲を歌うステージを映し出す。気づけば彼はディスプレイを両手で掴み、ポロポロと涙をこぼして、大声をあげて泣いていた。辛くて苦しくて、心が壊れてしまうほどだった『頂点への挑戦』を、こんなに堂々と美しく歩く人がいる。その感動が、もう空っぽだと思っていた心から涙となって溢れ出した。

自分にはもうその道を歩く力がなくても、夢への道を力強く歩く PC ②を応援したい。力になりたい。

彼にとって PC ②は、一度手放そうとした命を繋いでくれた恩人だった。

No.8

脱出と過去／隠された一面

Aika が言っていた「行かないやいけない場所」は本屋だった。彼女が抱える買い物かごには十数冊、それも少年マンガばかりが入れられていた。

「小さい頃から大好きなんです、少年マンガ。夢であふれてて、読んでるだけで元気になれるじゃないですか。でも、事務所から”趣味はお菓子作りにしる”って言われてて……。幼稚園の頃の夢は正義のヒーローだったんですよ。今日が発売日のマンガが多くて、どうしても紙の本で手に入れたかったです」

Aika は照れ笑いを浮かべながら本棚の間を進んでいく。そして一冊のマンガを手にとった。

「これ、トップアイドルを目指すマンガなんです。少年漫画だからスポ根だし割と泥臭いんですけど、それがすごくかっこよくて。主人公たちが一生懸命努力して、トップアイドルへの道を駆け上がっていく……。私、この漫画に憧れてアイドルになろうって決めたんです」

【以下ディレクター PC (+演出手助け PC) のみ閲覧可能】

Aika はまた別のマンガを手にとった。それは『絵筆の勇者』というタイトルで、内藤雄一という漫画家が描いたマンガだった。その表紙には、先日記者を襲ったあの、PC ①によく似た異能使いが描かれていた。

「これ……。少し前まで連載されてたマンガなんですけど、やっぱり、先日のあの人ですよね」

Aika はそう言いながらページをめくる。

「この作品、きっと”夢を与える”ことがテーマだったんです。でも終盤にだんだん方向性が変わっちゃって……。最初の方の雰囲気とかストーリーとか、すごく好きだったのにな」

そういう Aika の表情は、少し悲しそうだった。

戦場キャラクターデータ

Lv.4 絵筆の勇者 (憑依型)		表層	記録	根源
		20	60	70
No	コスト	異能	効果	
①	3	一線	任意のキャラ 1 人のランダムな属性 1 つに「5D ▶ 4D」の DM を与える。(アタック)	
②				
③	4	ソニックスケッチ	任意のキャラ 1 人の任意の属性に「6D ▶ 4D」の DM を与える。この攻撃によるアクション中、スタイルに「弱」を含む彩能は発動できず、すでに発動しているスタイルに「弱」を含む彩能の効果は無効となる。(アタック)	
④	4	認知の上塗り	自身を対象とする攻撃のロールダイスとビックダイスをそれぞれ「- 1D」する (サポート / 他 / ロール前)	
⑤	7	レイヤーチェンジ	自身を対象とする攻撃のビックダイスを最大「4D」取り除く。その後、取り除いたビックダイスの合計値分の DM を任意のキャラ 1 人の同じ属性に与える。(サポート / 自身 / 終了時)	
⑥	8	黒塗りの原稿	任意のキャラ 1 人の任意の属性 1 つを選択する。その属性に「最大値 + 1」となるダメージを与える。(アタック)	
◎ 【夢の描画】		◎ 【踊る筆先】		
1st バスダイス獲得時、任意の異能にストックを 2 つ追加する。		このエネミーが同一のラウンド中に 2 回目以降の攻撃をする際、ビックダイスを「+ 1D」する。		

内藤が描いていた漫画の主人公の姿を模した色喰らい。剣のような絵筆を振るい、そのインクは他者を「狂信」させる依彩を宿す。絵筆の勇者が描いたものは実体を持った眷属となる。

Lv.2 塗りつぶされた仲間たち		表層	記録	根源
		20	15	0
アクション	効果			
よってたかる	任意のキャラ 2 人の「根源」に「3D ▶ 3D」の DM を与える。			
◎ 【根源への凌辱】		◎ 【使役生物】		
このエネミーの攻撃対象となったキャラの「根源」がブレイクしている場合、他の任意の属性 1 つを攻撃対象とし、攻撃ロールダイスを「+ 2D」する。		「絵筆の勇者」が撃破されると、このエネミーも撃破される。		
内藤が描いた漫画の根源を曲げられたキャラクターたち。再び描き出された彼らは、自分たちが受けた凌辱を他者にも与えようとする。				

願望色の存在証明

Lv.1	シチュエーション 1：強大な刻印	シチュエーション解決方法 「表層」に累計で「25」点以上の DM を与える。
アクション	効果	
狂信の深緑	次のラウンド中、全ての PC の全ての彩能 ^{カラド} のコストは「+ 1」される。	
アリーナドームの屋上に描かれた異能 ^{イグゾシスト} の刻印は、存在者さえ支配下に置こうとする。		

Lv.2	シチュエーション 2：夢幻のインク	シチュエーション解決方法 「記録」に累計で「20」点以上の DM を与える。
アクション	効果	
飽き尽くされた展開	モブエネミー「塗りつぶされた仲間たち」を 1 体、戦場に追加する。	
「何度だって描き直してやる！ 仲間たちよ、俺の力となれ！」——— 絵筆の勇者		

第三勢力	シャイニー 『Shiny!』	表層	記録	根源
		40	40	40
アクション	効果			
シャイニー・フェイス！ とびっきりの笑顔	全ての PC のブレイクしていない任意の属性 1 つの最大値を「2D」増加させる（それぞれの PC が、最大値を増加させる自分の属性を選択する）。			
<small>チアー・アップ！</small> ◎【歌姫たちの願い】 このキャラが戦場に存在している限り、全ての PC は自身が行うあらゆる判定のロールダイスを「+ 1D」してもよい。				
「みんな、歌おう！」——— <small>アイカ</small> Aika				